

## 第25章 ヨーロッパにおける地域と人口と家族（ドイツ語圏）

村山 聡（香川大学）

### 【要旨】

ドイツ語圏に含まれるのは、通常、現在の国家単位で言えば、ドイツ連邦共和国、オーストリア共和国、スイス連邦およびベルギー王国の一部などである。ただし、本章では現在の国家単位だけでなく、なんらかの形でドイツと関連がある近年の学術論文を対象にする。

具体的には、*The History of the Family* 掲載論文について、ドイツ（Germany）で検索した場合に抽出された総数 331 本の論文を対象としている。そこにはドイツ以外の地域を対象とする論文も含まれる。同雑誌は 1996 年から刊行されており、初刊から現在までの全期間を対象とし、特に 2001 年から 2020 年にかけて、歴史人口学、家族史研究および地域研究の動向を探ることを課題とする。

**キーワード** ドイツ語圏、ヨーロッパ、歴史人口学、家族史、人口システム、地域研究

### はじめに

ドイツの歴史人口学グループの秋の大会が 2016 年 10 月 28 日から 29 日にかけて開催された（<https://www.hsozkult.de/event/id/event-81151> 閲覧確認日：2022 年 4 月 15 日）。

その時の大会タイトル「ドイツの歴史人口学の終焉—あるいは学際分野の新たな場所」（Das Ende der Historischen Demographie in Deutschland? – oder : Neue Orte der Interdisziplinarität）が衝撃的である。ミュンスター大学で、後にも少し触れるウルリッヒ・プフィスター（Ulrich Pfister）が主導する学科に属していたゲオルク・フェルティッヒ（Georg Fertig）が、2009 年にハレ大学歴史学科の教授に就任し、その後しばらくして開催した、このグループの最後の大会であった。この歴史人口学グループの記録（<https://blogs.urz.uni-halle.de/demografie/> 閲覧確認日：2022 年 4 月 15 日）は、2017 年で更新されなくなり、記録としてサーバーに残っているだけになった。

この歴史人口学グループは、ドイツ人口学会（Deutsche Gesellschaft für Demographie）の一員であったが、この時点でその一員ではなくなった。日本人口学会では元々このようなグループ分けはないかもしれないが、歴史人口学者のグループがその学会にはないことを意味する。それは後継者が十分に育たなかったということであるが、フェルティッヒが当時の大会の文章で問題にしているのは、ドイツの社会史や文化史の領域において、歴史人口学的研究が十分に積極的な役割を果たせていなかったことを挙げている。なお、現在のドイツ人口学会のグループ編成は、人口政策、人口学的方法、人口と社会の発展、出生率と家族、移民・統合・世界人口、死亡率・罹患率・高齢化そして都市と地域となっている。

物語的歴史学の領域が圧倒的な勢力を有するドイツの史学界において、歴史人口学はその地歩を十分に固めることができなかったという残念な結果であった。この歴史人口学グループが立ち上がったのは、アルトゥーア・E・イムホフ（Arthur E. Imhof）そしてヴァルター・G・リョーデル（Walter G. Rödel）の功績であり、1970 年代のことであった。その後、とりわけ 1984 年から 1985 年にかけて、歴史人口学的地域研究の洗練されたモノグラフが登場する。リーツェン、トリアー、北海沿岸地域、マインツ、オッペンハイムなどの研究であった。都市や小都市、一定の地域単位など様々な地域研究がオーソドックスな教区簿冊を使った家族復元法の適用された研究であった。イムホフの先駆的な業績からこの時点まで、歴史人口学的地域研究はその橋頭堡を築いたかのようにも思われた。しかし、多くが博士論文であったこれらの研究の研究者は大学の定職に就くことができなかった。

これらの博士論文等の意義について、30 年以上前の 1990 年に『三田学会雑誌』で紹介したことがある。速水融の還暦記念論文集『徳川社会からの展望—発展・構造・国際関係—』（同文館、1989 年）の一部の論文を取り上げた筆者の書評論文に近世近代数量経済史・歴史人口学者の斎藤修そして現代社会史家の矢野久が応答をしている。筆者は、それらの歴史人口学的地域研究を踏まえて地域社会構造史を提唱していたのであるが、そこで斎藤・矢野の両者から提出された論点は、まさに今回の研究動向サーベイの対象期間の問題の論点が先取りされていた。

ただ、その時点では想定していなかった大きな変化がある。ベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが統一され、ソビエト連邦が解体し、多くの中欧・東欧諸国が独立した。この歴史的な変化は、その後の歴史人口学研究特に家族史研究のあり方を

激変させることになる。本章では、首尾一貫した方法を取ることによって、その傾向を探ることにする。1996年に発刊された家族史研究の学術雑誌である *The History of the Family* (以下、HFと略称)に掲載された論文の中から、表題、要旨、内容において、ドイツ (Germany) でヒットした331本の論文の分析を進める。本報告書の中心的な対象期間は2001年から2020年の二十年間であるが、その期間を中心としてその前後を比較することによって、この期間の特徴を掴むこととする。

## 1. ヨーロッパ特にドイツ語圏の歴史人口学研究の現状を探る方法

イムホフが都市ギーゼンの研究で明らかにしていたように、教区簿冊の家族復元によって把握できた家族は全体の17.4%にしか過ぎなかった。リョーデルはこれが決定的問題であると指摘している (Rödel 1985)。都市が先導すると言っても良いドイツの歴史把握という点では、都市把握において弱点を持つ方法というには、非常に弱い歴史分析なのである。私の博士論文でも家族復元分析は進めていなかった。むしろできなかったと言ってよい。人口が急激に増大する社会において、ある意味で閉じられた空間の地域研究として家族復元を時系列的に行うことの限界を意味している。

この歴史人口学グループはドイツ人口学会の中のグループとしては消えたものの、個別研究が消えたわけではない。しかし、毎年大会を開くような活動はもう行われてはいない。また他方で、2014年にはヨーロッパ歴史人口学会 = European Society of Historical Demography が誕生している。第1回大会は、イタリア・アルゲーロで、2014年9月25日から27日にかけて開催された。

2016年には、9月21日から24日にかけて、2年に一度、開催するとして、ベルギーのルーヴァン大学で開催された。これが第2回大会である。国立社会保障・人口問題研究所が、日本からも参加を得た合同セッションの様子を紹介している (<https://www.ipss.go.jp/international/e/collab/o/e1609Belgium.html> 閲覧確認日: 2022年4月15日)。日本とベルギーとの150年に及ぶ交流関係を記念して、“Lessons from the Far East: Japan”と題して、次のような報告がなされた。司会は、ルーヴァン大学のWilly Vande Walleがしていた。

1. Satomi Kurosu (Reitaku University), “Marriage in Early Modern Japan: Family Strategies and Individual Lives”.
2. Noriko Tsuya (Department of Economics, Keio University), “Reproduction in

Early Modern Japan: Data, Methods, and Findings”

3. Ryuichi Kaneko (National Institute of Population and Social Security Research), “Historical demography of future or understanding the past via population projection”

その後は第3回大会が、2019年6月26日から29日にかけて、ハンガリー・ペーチュで開催され、第4回大会 (<https://iussp.org/en/4th-conference-european-society-historical-demography> 閲覧確認日: 2022年4月15日)は、Human-environmental nexus in the past: understanding links between demographic variability, ecology, and diseaseと題し、2022年3月2日から5日にかけて、スペイン・マドリッドで開催された。残念ながらサイトがそれぞれの開催地で持ち回りになっていることもあり、あまり充実したものではない。ただし、今後もヨーロッパにおける歴史人口学研究の牽引役になるのであろう。もっとも、ドイツ連邦共和国については、歴史学系の研究者の現状が反映された結果、特に積極的な参画は見られないように思われる。

ところで、本報告書は2001年から2020年にかけての歴史人口学の新展開についての考察を行うことが課題である。本章においては、すでに述べたように、HF (1996-2022年)誌上に掲載された論文の中から「ドイツ語圏」を考える。ここでいうドイツ語圏はドイツ語で書かれた歴史資料が存在している地域を指し、現在のドイツ連邦共和国、オーストリア、ドイツ語が話されるスイス以外に、チェコ共和国のようにドイツの貴族の所領があった地域あるいはさらに広域のスロベニアなど旧ハプスブルク家時代の中欧・東欧圏などを含む。ただし、本章で分析対象とする論文は、HFの全収録論文をGermanyで検索した場合に抽出された総数331本の論文である。タイトルや要旨だけでなく、本文や注もふくめて、Germanyが言及されている場合に限られたものである。分析対象の一つの母体として検討する価値があると判断した。同雑誌は1996年から刊行されており、初刊から現在に至るまでの期間全体を対象とし、特に2001年から2020年にかけてのヨーロッパ特にドイツ語圏の歴史人口学研究の傾向を探ることを課題としたい。

なお、紙幅の関係から、この331本の論文のすべてのリストを紹介することができないため、一部の論文を除いて、そのリストを参照できるURLを紹介しておきたい。331本の論文は新しいものからすべてナンバリングをしておき、本章での論文紹介における番号はそのリストの番号である。そのリストは、Google Driveによる共有設定をしている。このリンクを知っている全員に公開される形となっているため、参照して頂ければ幸いである。URLは以下の通りである。

[https://docs.google.com/spreadsheets/d/1mP5vpN\\_Oq1oaQkW2bfBAr-PP8QZF1QJebssH1u2Jfq8/edit?usp=sharing](https://docs.google.com/spreadsheets/d/1mP5vpN_Oq1oaQkW2bfBAr-PP8QZF1QJebssH1u2Jfq8/edit?usp=sharing)

## 2. The History of the Family のデータベースからキーワード Germany によって抽出された論文

ヨーロッパ特にドイツ語圏における歴史人口学研究は 21 世紀の最初の 20 年間で何か大きな変化があったのであろうか。

Anthropology, Cultural Studies, Demography, Economics, Family Studies, Gender Studies, History, Law, Literature, Policy Studies, Political Science, Religion, Sociology の諸分野を包み込む *Journal of Family History* が、タマラ・K・ハレヴン (Tamara K. Hareven) により創設されたのが 1975 年で、1976 年に第 1 号が公刊されている。1960 年代から開始された家族史研究が一つの確立をみたのがこの年であった。しかし、ハレヴンは、ロシアの家族史研究を推進している Andrejs Plakans と共に、新たに HF (*The History of the Family: An International Quarterly*) という学術雑誌を生み出した。これが 20 年後の 1996 年であった。

この家族史研究の中心的な二つの雑誌を大きく区別するのは、HF が歴史人口学的研究にかなりの重心を据えていることにあった。速水融を代表として、国際日本文化研究センターを基幹部局として発足したユーラシアプロジェクトと擦を一にしている (速水融, 1997, 221-252)。1995 年に開始し 2000 年に一応の終結をみた「ユーラシア人口・家族史プロジェクト」は、日本、中国、スウェーデン、ベルギー、イタリアという 5 地域の歴史人口学と家族史に関する国際共同研究プロジェクトであり、文部省 (現文部科学省の前身) 科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会における人口・家族比較史研究」が正式名称であった。年間 1 億円、5 年間でほぼ 5 億円という人文社会系では初めての巨大研究プロジェクトであった。歴史人口学を基本的アプローチに据えて家族史研究と協働させるという点で、HF 創刊と連動する世界的な動きだったのである。

もちろん、歴史人口学的家族史研究を牽引してきた研究者がすべてユーラシアプロジェクトに関係していたわけではない。例えば、ミハヤエル・ミッテラウアー (Michael Mitterauer)、ユルゲン・シュルムボーム (Jürgen Schlumbohm) やプフィスターなどが挙げられる。さらに上記の意味での広いドイツ語圏を対象とする研究者では、シーラ・オジルヴィー (Sheilagh Ogilvie) など、社会経済史系研究者で、やはりユーラシアプロジェクトと関係していない研究者もいる。オジルヴィーの場合も、HF には共著論文は一本あるものの、それほど積極的に関係してはいない。また、

ヨーロッパには、歴史人口学に特化した学術雑誌が各国にある。例えば、イタリアの *Popolazione e Storia* などである。著者はこの雑誌に招待され投稿したことがある (Murayama and Higashi 2012)。また、チェコの歴史人口学雑誌 *Historická demografie* は主にチェコ語で書かれているが、著者の論文も含めて、若干英語で書かれているものもある (Murayama 2007)。そこでは美作・行延 (行信) の宗門帳分析を紹介している。また、オジルヴィーはドイツのヴュルテンベルクの農村だけでなく、チェコも研究対象にしており、著者と同様にこの *Historická demografie* の編集委員をしている。

上記の個別地域・国家の歴史人口学研究の雑誌とは別に、世界レベルでの家族史に関する二つの学術雑誌の創刊に匹敵するような大きな変化、つまり新たな学問の登場のような大きな変化というのは、最近の 20 年間にはなさそうである。もっとも、津谷典子が現在、編者の一人となっている学術雑誌 *Advances in Life Course Research* は特筆すべきであろう。この雑誌は、2000 年から公刊されており、さらに、*Historical Life Course Studies* は、2014 年創刊であり、最近、黒須里美らの論文が掲載された (Kurosu et al. 2021)。

ところで、ちょうど本章の執筆時に勃発したウクライナ戦争にも言及しない訳にはいかない。プーチンとクレムリンが主導するロシアがウクライナへ軍事侵攻するというような異常事態が未だに起こる現状に驚愕している。家族史研究あるいは歴史人口学研究は、筆者がここしばらく主張しているように、改めて「長い 19 世紀」の問題として整理が必要なのではないであろうか (Murayama 2021)。

歴史人口学的家族史研究は、確かに基礎学問ではあるとしても、国家主導の社会問題に対して、どのような貢献をしてきたのかと、自問する。歴史人口学あるいは家族史研究は、国家をいかに分析対象に組み込むことができるのか。国家はあくまでも政治的な単位であり、人口学的メカニズムや家族システムの外にある事象なのであろうか。

1996 年に刊行された HF に掲載されている論文の傾向を見てみると、明らかに違いが見えてくることがある。速水融が掲げた歴史人口学と家族史あるいは家族社会学との対話を推進することをめざしたユーラシアプロジェクトは、明確にヨーロッパの家族史研究にインパクトを与えてきた。しかし同時に、それも 2000 年以降について、ヨーロッパにおける研究者の環境が大きく変化した影響の方が大きい。1989 年にベルリンの壁が崩壊し、ソビエト連邦が解体し、中欧で新たな国家が続々と誕生した。ソビエト連邦時代に、社会主義政権として単一の政体であったユーゴスラビアやチェコスロバキアは解体し、スロベニア

やチェコ、スロバキアなどの新たな国家が誕生するのは1991年である。

例えば、この執筆時点でロシアとの戦争の最中にあるウクライナのウクライナ人民共和国はロシア革命後、民族自決運動の結果として、1917年に国際的にも独立国家として宣言されたものの、第二次世界大戦後、ウクライナ西部はウクライナ・ソビエト社会主義共和国に合併され、国全体がソビエト連邦の一部となった。その後、ソビエト連邦の崩壊に伴い、1991年に独立を果たしている。このような新興国家群の家族あるいは歴史人口を考える場合、国家領域をどのように考えるか、微妙な問題である。

また、このいわば異常事態において、取り上げられるのはパワーポリティックスと悲惨な破壊と殺戮ばかりであり、ウクライナの肥沃な大地である黒土が取り上げられることは少ない。この黒土はロシア語で *чернозём*、英語のアルファベットでは *chernozyom*、通常は *Chernozem* と表記されるロシア語由来の黒土という名称である。ウクライナも含めた土壤地図をヨーロッパで描くと、この土地が非常に特徴的であることがわかる (Gebhardt et al. 2013, S. 66)。人口扶養力も高い国土を有している。

筆者がこの数年、遂行してきた JSPS/MESS に基づく二国間交流事業の相手国スロベニアは、ウクライナよりさらに西方にある。スロベニアの場合、時代によって書かれている歴史資料の言語が異なる。スロベニアのアドリア海沿岸部はプリモルスカと呼ばれるが、ヴェネチア共和国に組み込まれていた時代があり、例えば、ピランという都市は、イタリア語ではピラーノであり、1283年からヴェネチア共和国の支配に入り、ナポレオン・ボナパルトに同共和国が降伏する1797年までその支配は続いた。この期間の歴史資料特に行政関係史料はイタリア語で書かれている。またその後のオーストリア・ハンガリー帝国に組み込まれていた時代には、人口センサスなどもドイツ語で書かれている。多くの中欧でも同様である。

また、そのような近代という時代だけでなく、チェコ共和国の南ボヘミアなどでは、長くドイツ・フランケン等の出身の貴族の所領であった場合などがあり、その場合は、中世から近世にかけてもドイツ語で書かれている史料が多い。

いずれにしても、例えば、現代の国家単位としての「チェコ共和国」の家族について語ることに限界があり、それは、他の中欧、東欧においても同様である。ある程度普遍的な傾向を語ることはできるとしても、歴史を遡れば遡るほどその地域単位の家族の行動に関する歴史的意義は少ない。むしろ、南ボヘミアあるいはチェボニュー支配管区のようなより小単位での地域把握あるいは個別の都市や農村研究の方が、家族史的にも歴史人口学的にも意味のなるエビデンスを提供できると思われる。

人びとがどのような家族観を持ち、結婚し、子どもを生み育てるか。そのような家族システムは、個人の経験に基づく独立した社会システムと見られることもできる。しかし、支配関係が生み出す行政文書は慎重な検討を必要とする。租税徴収あるいは宗教把握のために行われる人的把握を行う際に、記載される単位は、個人なのかあるいは世帯なのか、家族なのか。人びとが実際に行う婚姻行動や再生産過程とその行政システムとのずれがある場合もあれば、その行政システムが先導して家族構成のあり方を決定づけるような場合もあるように思われる。

このような複雑な状況のなか、2001年から2020年に掲載された HF の論文には、次に述べるように、一定の傾向が見られる。この二十年間において、確かに、新たな家族史に関する学術雑誌の登場やユーラシアプロジェクトのインパクトのような大きな変化は見られないが、1989年革命を境とする中欧および東欧圏の変化は、歴史人口学的家族史研究において、伝統な手法を保持する傾向と同時に、確実に新たな歩みを進めている。家族とは何か、国家とは何か、改めて、数量的エビデンスを重視する歴史人口学的研究の成果そしてそれが家族史研究としても醸成されることが今後も大いに期待されることである。

### 3. 抽出された331本の論文の分析

#### 3.1 家族復元及び世帯・ライフコース分析そして多様なアプローチ

Stepfamilies, inheritance, and living arrangements in a rural society of Germany (Jürgen Schlumbohm) (6: 2021) (HFの論文紹介は、以下、原則として論文タイトル、著者名、リスト番号：交換年とする。) は、2021年のHFにオンラインで公開された論文であり、歴史人口学的家族研究の伝統的な流れを象徴するような論文である。同じくシュルムボームが、1996年に発表した *Micro-history and the macro-models of the European demographic system in pre-industrial times: Life course patterns in the parish of Belm (Northwest Germany), seventeenth to the nineteenth centuries* (Jürgen Schlumbohm) (324: 1996) の論文タイトルには、北西ドイツのベルム教区の分析であることが明確に出ている。この教区に関する家族復元によって、彼が、1994年に公刊された著作の一部改訂版の論文である。

しかし、このタイプの教区簿冊を利用した研究が中心を占めているということは言えない。経済史家として歴史人口学的論点も組み込んでいる *Women's bread - men's capital. The domestic economy of small textile entrepreneurs in rural Zurich in the 17th and 18th centuries* (Ulrich

Pfister) (285: 2001) は、チューリヒの農村域におけるパンに関する独特の経済情報を活用している。プロト工業時代において女性労働が中心であったパン焼きの影響力が検討された。Antoinette Fauve-Chamoux (284: 2001) や Tom Ericsson (283: 2001) (以下、著者とリスト番号、刊行年だけを例示する場合には、著者名のカタカナ語変換は省略する。) などもこのような個別の小経営に注目した研究がある。HF では特集が組まれることが多いため、その特集の内容がそれぞれの時代の特徴を表していると言って良いであろう。

ユーラシアプロジェクトの五年間の後に、その影響下で、取り組まれた特集「ユーラシアの観点から見た家族の継承」(Family transmission in Eurasian perspective) もある。もっともユーラシアプロジェクトは、センサスデータが中心に展開されたプロジェクトであったため、そのような歴史資料の存在しない地域では、それぞれ違ったアプローチが工夫されている。Marco Aime, Stefano Allovio, Pier Paolo Viazzo (223: 2005) は、西アルプスのコミュニティにおける農民、羊飼いでして使用人の曖昧な境界線を問題にし、Sheila McIsaac Cooper (224: 2005) は、英国にライフサイクルとしての奉仕に関して、それは衰退し、終焉を迎えていたのか、つまり、奉仕から隷属へ変わったのか、という問いかけをしている。Christine Fertig, Georg Fertig, Volker Lünemann (225: 2005) は、むしろ伝統的な土地、建物、家産に関する伝統的な問いかけとして、ドイツ北西部ウェストファーリアにおける相続、継承、家族間の移譲を扱っており、そこでは世帯単位の持続を問題にしており、日本の直系家族の問いかけに近い。それに対して、前者二者は、社会経済システムの地域的特徴や産業化に伴う時代的な変化を扱っている。この特集はその後の研究課題の変化を象徴しているかもしれない。

### 3.2 北西ヨーロッパ型婚姻パターンの境界線をめぐる中東欧研究

中東欧での歴史人口学的家族研究が深化する過程において、旧来の北西ヨーロッパ型婚姻パターン、特にその境界線地域をめぐっては新たな知見が登場してきた。『歴史人口学と家族史』(速水融編 2012) では、この議論などの基礎文献の邦訳を確認できる。ただし、近年において、次第に明らかにされてきたことは、これまでの常識や共通認識あるいは特定のアプローチの方法や歴史資料の取り扱いの修正を迫る可能性があるように考える。

斎藤修が、『西洋史学』において、秋田茂・脇村孝平責任編集『人口と健康の世界史』(ミネルヴァ書房, 2020年) に関する書評(斎藤 2021) を発表している。斎藤によれば、この著作はいわゆる「人口転換」論や「疫学的転換」論を超えるような企画であり、多くの論点や視点が盛り込まれており評価できるものの、決定的な問題点もあるという。本書は二部構成になっており、前者は主に「人口転換」の中でも出生転換を扱っているのに対して、本来なら死亡転換が扱われるべき後者では死亡転換は取り扱われることはなく、疫病史のトピックスが並ぶ構成になっていると指摘している。さらに、「人口システムという視点が陽表的」ではなく、さらに本来、人口システムを構成すべき変数として、出生と死亡だけではなく、結婚も重要な変数として取り上げられるべきであるものが、そのような議論はなされていないと指摘している。「近代以前の北西ヨーロッパ地域では結婚年齢の決定要因として就業機会が重要な意味をもっていたゆえに、結婚を通じた人口と経済のバランスがとられていたとするのが西欧型結婚パターン論であったが、本書では取り上げられていない」(斎藤 2021, 105)。さらに移動も十分には検討されていない。

著者自身、本書では一つの章として人口転換以前のドイツにおける乳児死亡率の地域差について書いているが(村山 2021)、上記のような論点の中にうまく落とし込めてはいない。HF の論文を検討している本章では、西欧型結婚パターン(本章では北西ヨーロッパ型婚姻パターンと表記している)はその中欧・東欧圏との境界線をめぐって新たな議論が生み出されていることを紹介しておく価値があるように思われる。というのもそれは、西欧あるいは北西ヨーロッパ内部の人口システムの捉え方に対しても新たな問題提起となる可能性があるからである。しかし他方で、政治的な領域単位が不透明な地域、あるいはドイツのように領邦国家が分裂した状態あるいはハプスブルク家支配領のような複数の文化的空間が組み込まれているような地域では、一つの人口システムが機能していると考えて良いのかどうか、まだ多くの個別の研究蓄積がなされている状態と考えて良いように思われる。

筆者自身、日本人口学会第72回大会(2020年11月14-15日、埼玉県立大学、オンライン開催)でも報告をしたように、チェコ共和国・南ボヘミアの研究でも次第に明らかになって来ていることがある。当地の支配領主がドイツ語圏の貴族の出身であり、支配関係の人的管理や土地管理の文書においてドイツ語が使用されたり、あるいは、移民のコロニーが散見される地域があったりす

る場合もあり、ある地域の家族関係や婚姻関係は、一つの閉鎖的な地域として見るのが難しい。ハプスブルク家支配領やその他先にも述べたようなイタリア支配のあった地域などもスロベニアでは見る事ができ、家族システムが複雑であることが次第に明らかにされてきている (Panjek 2021)。いずれにしても人口システムを考える場合、斎藤も指摘しているように移民や労働移動も含めた移住をどのように捉えるかは重要な論点である (斎藤 2021, 105)。

その意味でも、複雑な家族システムについては、北西ヨーロッパ型婚姻パターンの境界線をめぐって多くの研究成果が生み出されている。新しいものから順に古いものへと並べると、管見の限り、以下ようになる。The prevalence of single-parent families and stepfamilies in Europe: can the Hajnal line help us to describe regional patterns? (Markus Knüll, Anne-Kristin Kuhnt, Anja Steinbach) (83: 2016); A stem-family society without the stem-family ideology? The case of eighteenth-century Poland (Mikołaj Szoltysek) (87: 2016); The patriarchy index: a comparative study of power relations across historical Europe (Siegfried Gruber, Mikołaj Szoltysek) (98: 2016); Cohabitation in Europe: a revenge of history? (Jan Kok, Dalia Leinarte) (100: 2015); How unique is the Western European marriage pattern? A comparison of nuptiality in historical Europe and the contemporary Arab world (Theo Engelen, Paul Puschmann) (146: 2011); Why weren't (many) European women 'missing'? (Katherine A Lynch) (155: 2011); Central European household and family systems, and the 'Hajnal-Mitterauer' line: The parish of Bujakow (18th-19th centuries) (Mikołaj Szoltysek) (212: 2007) などである。ポーランド出身のミコライ・スゾルティシエック (Mikołaj Szoltysek) がこの分野でも重要な貢献をしてきた。

スゾルティシエックは以前、ドイツのマックス・プランク人口学研究所 (Max Planck Institute for Demographic Research) で研究に従事し、現在は、ハンガリー人口学研究所 (Hungarian Demographic Research Institute) の主任研究員をしている。カール・カーザー (Karl Kaser) やミッテラウアーがかつて述べたように、特定の地域文化が明確というよりも、移行文化圏的な特徴を有した地域が多い。北西ヨーロッパの婚姻パターンの境界線は文字通りの線ではなく、当然、圏域なのであり、その地の詳細がわかればわかるほど、複雑な家族システムや人口システムを有したことがわかってくるのである。スゾルティシエック

は、カーザーやミッテラウアーの議論を、歴史人口学的な数量的エビデンスで実証したのである。この圏域での事例研究はさらにその後蓄積された。

スゾルティシエックの言うヘイナル・ミッテラウアー線の地域研究は新たな知見を提供しているが、中欧圏を超えたウクライナなどの地域研究はまだまだこれからということであった。今回の331本の抽出された論文の中では、ウクライナに関しては、(104: 2015) や (95: 2016) の2本が含まれていた。平和が前提であり、さらに人文社会科学系研究への配慮が十分になされる必要がある。西欧圏同様に、さらにそれ以上に、困難が伴っているというのが現状である。ドイツ連邦共和国においても、かなり以前から、歴史研究全体において、教授職は確実に減少してきた。

### 3.3 ナラティブアプローチそしてセンサス分析における地域研究

中欧・東欧圏への家族史・歴史人口学研究の拡大は、北西ヨーロッパ型婚姻パターンの再検討を余儀なくした。他方で、地域研究として、あるいは歴史資料の存在に規定される一般的な歴史研究において、言語の共通性は一定の地域研究を自明の前提とする。家族史研究としては多くのナラティブ研究が公表されている。論文タイトルの羅列になるが、以下のようにリストアップできるであろう。Moving backward and moving on: nostalgia, significant others, and social reintegration in nineteenth-century British immigrant personal correspondence (David A Gerber) (93: 2016); Generational discourse in urban youth images. Private letters and popular literature in the case of Nuremberg's Tucher family around 1550 (Christian Kuhn) (160: 2010); Interchanged identities. The role of a Jewish school in a mixed marriage (Éva Kovács, Júlia Vajda) (271: 2002); Veiling and denying the past. The dialogue in families of Holocaust survivors and families of Nazi perpetrators (Gabriele Rosenthal) (272: 2002); East German dissident biographies in the context of family history. Interdependence of methodological approach, and empirical results (Ingrid Miethe) (273: 2002); Continuity and change over the generations. Trials and tribulations of an East German family (Simone Kreher) (274: 2002); Women in older ages-"old" women? (Sylvia Hahn) (276: 2002); "Virgins-Widows-Spouses". On the language of moral distinction as applied to women and men in the Middle Ages (Bernhard Jussen) (277: 2002)。HFで

は、特集が組まれることの多く、そのため、2002年にこの種の論考がまとまっている。

他方で、主に国家が主導するセンサスタイプあるいは個々の地域単位を有した行政文書群の歴史資料の検討も、ナラティブアプローチと同様に、一定の地域を研究対象地域として自動的に選択される場合が多い。ヨーロッパ各地におけるセンサス等の行政文書研究は新たな地域研究としての展開も見られる。例えば、婚姻簿を主たる分析対象とするスイスのルツェルン地域研究として、*Social homogamy, early industrialization, and marriage restrictions in the canton of Lucerne, Switzerland, 1834-75* (Simon Seiler) (51: 2019)、同じく 35 教区の婚姻簿を利用したルーマニアのトランシルバニア研究、*Beyond the Visible Pattern: Historical Particularities, Development, and Age at First Marriage in Transylvania, 1850-1914* (Elena Crinela Holom, Mihaela Hărăguș, Oana Sorescu-Iudean) (58: 2018) などがあ。また、バルセロナの地域研究としては、1900 年において、250 教区に関する 60 万件の婚姻データベース (1451-1905 年) を活用した、*The apple never falls far from the tree: siblings and intergenerational transmission among farmers and artisans in the Barcelona area in the sixteenth and seventeenth centuries* (Gabriel Brea-Martínez, Anna Cabré, Joan-Pau Jordà Sánchez, Joana-Maria Pujadas-Mora) (59: 2018) などが挙げられる。

この系列としては、第三世界の集計データ分析である *Measuring and explaining the marriage boom in the developed world* (Jesús J Sánchez-Barricarte) (63: 2018) あるいは、グローバルデータベースを展開する *Mosaic: recovering surviving census records and reconstructing the familial history of Europe* (Siegfried Gruber, Mikołaj Szoltysek) (97: 2016) などが注目できる。

まとまったセンサス研究は、10 数年前の 2004 年に発表されている: *From parish register to the "historical table": The Prussian population statistics in the 17th and 18th centuries* (Jürgen Wilke) (235: 2004); *The 1881 census in the Russian Baltic provinces: An inventory and an assessment* (Andrejs Plakans, Charles Wetherell) (239: 2004); *Early Danish census taking* (Hans Christian Johansen) (240: 2004); *Antoine Deparcieux (1703-1768) and demographic data collection* (Jean-Marc Rohrbasser, Christine There Théré) (241: 2004); *The Norwegian census: An international and long-term perspective* (Gunnar Thorvaldsen) (242: 2004);

*The birth of population statistics in Sweden* (Peter Sköld) (243: 2004)。しかし、ここでもドイツ語圏研究者のこのコミュニティへの貢献は残念ながらほとんど見られない。

### 3.4 移民研究・特殊集団そして多地点比較・対比研究

一定の地域に家族システムあるいは人口システムが存在しているというアプローチとは異なり、特定の集団あるいは同じヨーロッパでも多地点を比較あるいは対比 (この対比研究は特に高橋基康が提唱する方法である) するような研究が多く蓄積されている。その多くはヨーロッパ特有の歴史的背景ならではと思われる。

都市エカテリンベルクの少数派研究として乳児死亡率と宗教を扱っているのが、*Urban infant mortality and religion at the end of the nineteenth and in the early twentieth century: the case of Ekaterinburg, Russia* (Julia Borovik, Elena Glavatskaya, Gunnar Thorvaldsen) (62: 2018) であり、寡婦に焦点化した *Widowers and their sisters-in-law: family crises, horizontally organised relationships and affinal relatives in the nineteenth century* (Margareth Lanzinger) (67: 2018) があり、これはオーストリアの家族史家の論文である。

旧来から継続性のある移民研究特に移民戦略に関する研究は多いが、ナラティブアプローチの傾向も強い。紙幅の関係で、これまで同様、論文番号と刊行年のみを記載すると (181: 2009)

(182: 2009) (183: 2009) となる。その他、*For the good of the family: migratory strategies and affective language in Portuguese migrant letters, 1870s-1920s* (Marcelo J Borges) (85: 2016) や *The transnational life and letters of the Venegas family, 1920s to 1950s* (Romeo Guzmán) (86: 2016) に見られるように、手紙の記載に関する研究など、家族史研究の雑誌を検討しているが故に、人口システムとの連動では必ずしも議論されることのない家族史研究固有のものも多い。

その傾向は、多くの避難民研究である (68-72: 74: 76: 2017) でも同様である。たとえば、下記の引用文献にも掲載した *Balint, 2017* (71: 2017) の論文要旨には次のように書かれている (一部省略)。

1949 年、赤十字と連合国が戦後に設立した国際追跡サービスの児童捜索部門は、強制労働者から生まれ、生後 8 カ月でロッテンミュンスターの病院に預けられた 4 歳の男の子の母親探しを開始した。・・・ナチスの奴隷労働、迷子、強制養子縁組、亡命、アイデンティティの模索といった、オーストラリアにたどり着

いた多くの離散した人びとが経験した移住の歴史に光を当てることができる。・・・。

その他、特殊な集団研究は旧来からあり、例えば、捕鯨集団 (326: 1996)、船舶製造コミュニティ (298: 1999) など、また、移民においても特有のネットワーク集団が観察されたヘッセン・カッセルの事例研究 (193: 2008) などがある。

地域単位を軸に考える人口システムや家族システムとは異なる文脈での家族史研究が多く登場している。この点、いくつかの多地点の比較・対比研究においても新たな視点が展開される。例えば、Poor relief and families in nineteenth-century Ireland and Italy (Mel Cousins) (191:2008) などの研究方向は、さらに上記のような離散民研究などの視点も組み込まれるとするならば、新たな展開が今後見られるかもしれない。

### 3.5 The History of the Family (HF) の四半世紀

HF の 1996 年から 2000 年を第一期、2001 年から 2010 年までを第二期、2011 年から 2020 年までを第三期、そして、2021 年以降を第四期と呼んでおく。第一期は五年間、第四期は二年間だけのデータであることに注意が必要である。また本報告書は本来、第二期と第三期のみの検討ということになると思うが、前後の時期との違いを最後に見てみよう。

表 1 The History of the Family 掲載論文の Germany 検索結果：1996 年から現在まで

期間	1996-2000年	2001-2010年	2011-2020年	2021年-	集計
当該論文数	45	130	132	24	331
単著	37	97	70	16	220
%	82.2%	74.6%	53.0%	66.7%	66.5%
共著	8	33	62	8	111
%	17.8%	25.4%	47.0%	33.3%	33.5%
単一国家単位	38	89	87	17	231
%	84.4%	68.5%	65.9%	70.8%	69.8%
複数の国家単位	5	39	43	7	94
%	11.1%	30.0%	32.6%	29.2%	28.4%
単一地点	8	26	16	4	54
%	17.8%	20.0%	12.1%	16.7%	16.3%
複数の地点	8	29	44	12	93
%	17.8%	22.3%	33.3%	50.0%	28.1%
地域分析	30	73	82	10	195
%	66.7%	56.2%	62.1%	41.7%	58.9%

表 1 にあるように、単著か共著かは、いずれかであり、331 本の論文はいずれかに分類される。そのような場合は両者を合わせると 100% となる。その他の項目は該当しない場合もあるため、合算しても 100% にはならない。

ところで、この分類では非常に特徴的な変化が観察できる。第四期はまだ少ない本数しかないので、この時点でその時期の傾向を押しはかることはできないが、この四期のうち、初期は単著傾向

が強く、次第に共著論文が増えている。これは、一国のみを扱った研究から複数の国家領域を扱った研究が増えている現状とも連動している。それは、家族史的歴史人口学あるいは歴史人口学的家族史研究が、いわゆる西欧から中欧東欧へと研究対象地が拡大していることにも関係がある。

というのも、すでに述べてきたように、1991 年に東欧圏を中心に多くの国家が旧ソビエト連邦から独立し、フランスやドイツ、オーストリアなど、旧来、歴史人口学あるいは歴史人口学的家族研究の蓄積が多かった地域より、これらの新独立国家群の中でも、新しく EU に加盟した国々での研究が進んでいるからである。さらに単一村や地域の研究から複数の村落や地域を対象とする比較研究が増えていることも時代的な変化と見ることができそうに思う。そのような傾向の中で、ヨーロッパ型婚姻パターン特にその境界線に位置する地域に関して新たな事例研究が進展したことが重要な変化であった。

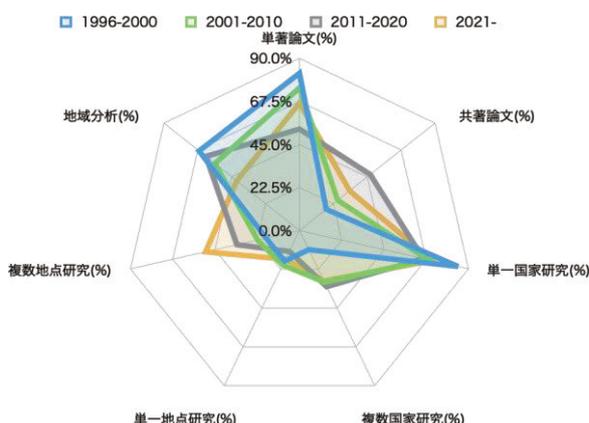


図 1 Germany 検索結果：The History of the Family 所収の 331 論文のレーダーチャート

図 1 は、表 1 をチャート図にしたものであるが、第三期は共著論文が明確に増えていることが鮮明である。歴史人口学あるいは家族史研究において、ヨーロッパ大でのプロジェクト研究などが増えていたことが想像できる。ただし、この傾向が第四期にまで持続するかどうかは確かではない。また、単一地点研究よりも複数地点研究が増えている傾向が確認できる。

### おわりに

EU あるいは NATO 対ロシアという新たな地政学的構図によるウクライナ危機を目の前にして、また多くの市民が犠牲にされている悲惨な現状において、憂えるべきこととしても、改めて北西ヨーロッパ型婚姻パターンとは何かを考える

重要な契機となっている。ウクライナでは実に多様な民族を観察することができるからである。

HF誌上では、1989年革命を経て、ソビエト連邦解体を受け、新たに登場してきた中欧・東欧圏の国々や地域で新たな歴史人口学・家族史研究の進展が見られ、まさにその地政学的な対立構図を超えた人的知的交流が進んできたばかりである。このウクライナ危機が後々までこの交流を抑制してしまうことは当然予想される。しかし、今こそ、再びネオナチあるいはナチが根深く喧伝される状況においてこそ、ドイツ語圏特にハプスブルク家の持つ歴史資料学的な特徴を把握し、その境界線を超えた地域との相互関係を精密に検討すべき時期であると考えらるべきであろう。

速水融が、歴史人口学と家族史との対話を掲げてユーラシアプロジェクトを立ち上げてからすでに四半世紀を超えている。その対話がどのような地域単位で議論すべきかが新たに問われていると考える。日本という単位ですら、東アジアそしてアジア大で考察するとすれば、自明ではなく、まして、「ドイツ語圏」は常に歴史的な実験場のような様相である。筆者自身の問題設定からするならば、ここに環境史的な視点が組み込まれることを大いに期待するところである。人口システムそして家族システムと自然の制約性そして自然環境の改編・回復力との相互関係はまだ未開拓な領域であると考えらる。

本稿は、科研B(19H01569)、科研B(20H01523)およびJSPS/MESSのスロベニアとの二国間交流事業(2019-2021年度)の研究成果の一部である。

## 引用文献

- Balint, Ruth, 2017, "Alexander and Anastayzia: the separation and search for family among Europe's displaced", *The History of the Family*, 22-4, 432-445.
- Gebhardt, Hans, Rüdiger Glaser und Sebastian Lenz, hrsg., 2013, *Europa - eine Geographie*, Berlin/Heidelberg: Springer-Verlag.
- 速水 融, 1997, 『歴史人口学の世界』, 岩波書店。
- 速水 融編, 2012, 『歴史人口学と家族史』, 藤原書店。
- Kurosu, S., M. Takahashi, and H. Dong, 2021, "Thank You, Akira Hayami! The Xavier Database of Historical Japan", *Historical Life Course Studies*, 11, 112-131.
- 村山 聡, 1990, 「歴史人口学におけるミクロとマクロ: 日本およびドイツ語文化圏における 'Historical Demography' の比較」, 『三田学会雑誌』, 83-1, 4月, 176-190 ページ。

Murayama, Satoshi, 2007, "Determinants of inheritance patterns in an early modern Japanese village, Yukinobu", *Historicka demografie*, 31, pp. 91-116.

Murayama, Satoshi, and Noboru Higashi, 2012, "Seashore villages in Amakusa: Takahama and Sakitsu. A comparative study of population registers and disaster management in the 19th Century, Kyushu, Japan", *Popolazione e Storia*, 1/2012, pp. 9-28.

村山 聡, 2020, 「近代に向かう人口と環境—ヨーロッパ, 特にドイツを中心に—」, 秋田茂・脇村孝平責任編集, 『人口と健康の世界史』, ミネルヴァ書房, 41-62 ページ。

Murayama, Satoshi and Hiroko Nakamura, 2021, "'Industrious Revolution' Revisited: A Variety of Diligence Derived from a Long-Term Local History of Kuta in Kyo-Otagi, a Former County in Japan", *Histories*, 1 (3), pp. 108-121; <https://doi.org/10.3390/histories1030014>

Panjek, Aleksander, 2021, "Land will tear us apart: family-farm division and real estate market in Slovenia (sixteenth to eighteenth centuries)", *The History of the Family*, published online: 21 Dec 2021, pp. 1-28.

Rödel, Walter G., *Mainz und seine Bevölkerung im 17. und 18. Jahrhundert*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GMBH, 1985.

斎藤 修, 2021, 書評: 秋田茂・脇村孝平責任編集, 『人口と健康の世界史』(ミネルヴァ書房, 2020年), 『西洋史学』, 第272号, 12月, 104-106 ページ。

Szołtysek, Mikołaj, 2007, "Central European household and family systems, and the 'Hajnal-Mitterauer' line: The parish of Bukakow (18th-19th centuries)", *The History of the Family*, 12-1, pp. 19-42.

<引用文献に関するお願い>

この引用文献リストでは、本文で取り上げた文献について、紙幅の関係でごく一部のみを掲載しています。

本文にも書きましたように、*The History of the Family*誌上に掲載された論文全体の中から、Germanyというキーワードで331本の論文を検出しています。*The History of the Family*のTaylor & Francis Onlineの下記のサイトを利用しました(閲覧確認日: 2022年4月15日)。

<https://www.tandfonline.com/toc/rhof20/current>

この検索結果から、特集号のタイトルや要約だけのもの、あるいは Index などは除いています。ここで抽出した論文リストは、Google Drive で共有しており、下記のリンクからアクセスできます。URL は下記の通りです。

[https://docs.google.com/spreadsheets/d/1mP5vpN\\_Oq1oaQkW2bfBAr-PP8QZF1QIebssH1u2Jfq8/edit?usp=sharing](https://docs.google.com/spreadsheets/d/1mP5vpN_Oq1oaQkW2bfBAr-PP8QZF1QIebssH1u2Jfq8/edit?usp=sharing)

上記のリンクで開くことができるのは、エクセルファイルで、ワークシートの一枚目は抽出したオリジナルデータで「元データ」としています。そのデータから不要な項目を除き、単著、共著などの分類を行ったものが二枚目の「331本の論文の分類表」です。分類上、曖昧な部分もあり、今後さらに検討する予定です。